

第1回 中之条町立六合中学校検討委員会 会議録

- 1 会議の名称 第1回中之条町立六合中学校検討委員会
- 2 会議の期日 平成30年8月3日(金)
- 3 会議の場所 中之条町ツインプラザ 大会議室
- 4 会議に出席した検討委員
委員 山本 隆雄 (中之条町議会 議長)
委員 篠原 文雄 (中之条町議会 文教民生常任委員会委員長)
委員 山本 日出男 (中之条町議会 議員) 欠席
委員 大森 昭生 (共愛学園前橋国際大学 学長)
委員 細井 雅生 (高崎経済大学 地域政策学部教授)
委員 新井 小枝子 (群馬県立女子大学 文学部教授)
委員 新藤 慶 (群馬大学 教育学部准教授)
委員 安カ川 幸好 (六合地区区長会 会長)
委員 山本 秀明 (六合地区区長会 副会長) 欠席
委員 中沢 博 (六合中学校 校長)
委員 山口 暁夫 (中之条中学校 校長)
委員 萩原 豊子 (六合地区学校評議員会 評議員)
委員 市川 昭一 (六合地区学校評議員会 評議員)
委員 武藤 勝年 (六合中学校PTA 会長)
委員 富沢 陽子 (六合中学校PTA 副会長) 欠席
委員 篠原 直巳 (六合小学校PTA 会長)
委員 田村 一美 (六合小学校PTA 副会長)
委員 清水 健介 (六合こども園PTA 会長) 欠席
委員 大谷 郁美 (六合こども園PTA 副会長) 欠席
- 5 会議に同席した教育委員・職員
教育長 宮崎 一
委員(教育長職務代理者) 登坂 初夫
委員 清水 博巳
委員 小菅 加代子
委員 高橋 久夫
こども未来課長 宮崎 靖

生涯学習課長	富沢 洋
教育指導係長	矢嶋 将之
総務係長	飯塚 和子

6 開会

午前10時30分、こども未来課長、第1回中之条町立六合中学校検討委員会の開催を宣す。
教育長より開会の挨拶。

(教育長)

委員の承引及び本日の出席に対して感謝を述べる。六合地区の学校の在り方については、平成24年12月から六合地区学校検討委員会が組織され、平成26年7月に町及び教育委員会に報告書を提出いただいた。その中で、六合地区のよりよい学習環境についての検討を継続する旨要望があり、それを受けて、平成29年度に六合地区の住民を対象に3回の「六合地区学校の在り方を考える懇談会」を開催した。報告書と懇談会の内容を整理する中で、定例教育委員会会議並びに町長が設ける総合教育会議において、生徒に生きる力をはぐくむため、六合中学校の在り方や方向性について検討委員会を組織して検討いただくことになった。委員の皆様には、設置の目的をご理解いただき、子どもたちにとってより望ましい教育環境を確保するにはいかにあるべきか、子どもを中心に据えてご検討いただきたい。また、今年度をめどに検討委員会としての報告書を町及び教育委員会に頂戴したいと考えている。

7 委嘱状交付

教育長より、委員名簿1番の山本隆雄委員を委員代表として委嘱状を交付。

8 自己紹介

各委員、名簿順に自己紹介。その後、教育委員及び事務局員の自己紹介。

9 会長の選任について

設置要綱第3条第1項により、会長の互選。立候補がないため、事務局より篠原文雄委員を会長とする案が示され、これに全員異議のないものと認め、承認。

(篠原文雄会長)

六合中学校検討委員会の承引及び出席に感謝を述べる。今後の方向性を示していく皆様の貴重な意見、見地をいただきながら検討いただき、この委員会がその意義を十分発揮できるよう期待する。会長の大役身に余るが、委員の協力を得て、六合の子どもたちの教育環境をどのように整えていくか、今年度中に意見を集約し、方向性を示していけるよう、協力を願う。

資料確認の後、設置要綱第3条3項による職務代理者の指名。安カ川幸好委員が指名される。

会議録署名人については、会長及び委員2名とする。今回の委員2名は、山本隆雄委員と武藤勝年委員とする。

10 協議

(1) 報告並びに現状説明

事務局より資料に沿って報告並びに現状の説明がなされる。

- ・資料1 検討委員会設置要綱
- ・資料2 六合学校検討委員会報告書（答申書）町長宛
- ・資料3 六合地区学校等の在り方を考える懇談会・検討委員会経過
- ・資料4 平成30年2月13日開催懇談会資料：六合地区毎戸配付資料
- ・資料5 平成30年5月1日生徒数一覧表

報告及び現状説明に対する質問

(A委員)

資料5について、児童生徒数の男女構成比を知りたい。

(B委員)

資料2の六合地区学校検討委員会報告書（答申書）は平成26年当時の内容である。この総括にある「山村留学」や「子供のいる家庭の町営住宅の使用料の減免」などの地域振興政策について、現状はどのようになっているのか。

(C委員)

人口減少は全国的な傾向である。中之条独自で動いても効果は薄い。生徒数の減少傾向について、中之条町だけでなく、吾妻郡全体の傾向がわかる資料があるとよい。

(D委員)

学識経験者は入山、和光原等の現状は見ているのか。

(A委員)

説明会にて、六合中学校を訪問した。

(D委員)

大変な山間部であり、移動に伴う困難もある。実感を伴った検討を願う。

(E委員)

学生も連れて、年に7、8回は六合地区に調査に訪れている。

資料4に示された4つの選択肢について、これ以外の選択肢が検討されたことがあるか。

(篠原文雄会長)

ここまでの質問については、次回の委員会に報告してもらうこととします。

(2) 意見交換

(篠原文雄会長)

委員会の目的は、「六合中学校において、生徒に生きる力をはぐくむため、六合中学校の在り方や方向性について検討し、より望ましい教育環境を確保する」ことにある。趣旨に則ったご意見をお願いしたい。

(C委員)

来年以降、西吾妻福祉病院でも産婦人科がなくなるなど、吾妻郡全域で人口減少の影響が見え始めている。児童生徒の減少についても、単独の町村で議論しても解決は不可能な時代がやってくる。緊急医療、子どもも産めない吾妻では、若者が帰って来なくなるだろう。吾妻郡全体を見渡し、各分野で総合的な検討が必要と考える。

(A委員)

非常に難しい問題で、どの選択肢も難しく感じており、ベストな選択が見いだせないでいる。まず、本委員会の趣旨は「生徒に生きる力をはぐくむため、六合中学校の在り方や方向性について検討し、より望ましい教育環境を確保する」であることを押さえたい。学校のもつ役割について考えると、地域に対しての意義・役割があり、内閣府・文科省でも学校を核とした地域づくりという考え方も示されており、このことには一定の意味があると考えられる。しかし、子どもの学びの環境が好ましくない状況にも関わらず、地域振興のために学校を残すのであれば、言い方はよくないが、子どもを犠牲するということにもなりかねない。この場合は、子どもにとってどのような環境が適切なのかを中心に据えて議論すべきであろうと考えている。

その上で、現在求められている学力について考えると、テストで100点をとるような能力のみが求められているわけではない。100点を取るためには、少人数学級が有効といわれているので、大きな学校では、わざわざ少人数クラスを設定して授業を行うところもある。一方で、文科省が示す今後必要とされる能力は、多様な考えの人と協働しながら、多種多様な意見を整理しながら自分の課題を見つけていくような力などである。よって、いつも決まったメンバーでしか議論できないような状況よりは、多数の多様な意見の中で自他の意見を比較しながら学び合っていくことの方が理想に近いといえる。

参考までに、前橋地内で学校の適正規模の検討委員会を行ったときには、できれば1学年2クラスになるような規模を目指すことで議論された経緯がある。

本件の一番のネックは、立地にあると考える。仮に中之条中学校へ統合したときに、往復2時間かかる通学距離が、果たして子どもにとって適切であるだろうか、この1点についても、かなり議論ができるだろうと考えている。

これだけの通学の負担を子どもに課せないと決まれば、この規模の学校で、先程お示したような学びをどのように実現していくかについて、予算との兼ね合い、コミュニティスクール化、学校魅力化コーディネーターの配置、学生の関わり、地域の人の関わり等について具体的に考えていけばよいだろう。

よって、まず子どもたちにこれだけの通学負担を課すかどうかについて、保護者の方々の意見を聞くなどしながら議論できるとよいだろう。

(E委員)

通学時間については、冬場の雪を考えると、更に時間がかかるであろうことを考慮すべきである。中之条中学校に通わせるとして、冬場の部活動で、子どもの希望通りに活動させてやることができるか、考える必要がある。可能なこと不可能なことを明確にできなければ、議論にならない。

また、六合地区の社会資源について考えると、小学校とこども園は残すことが決定している。これを活用して、小学校に中学校の機能を乗せることだって検討の余地はある。場所や建物にこだわらず機能として捉えて議論することもできたらよいと考えている。

(F 委員)

選択肢から判断することは、個人的には難しいと感じている。しかし、そのよう選択肢を選んだ場合に起こるであろう課題の予想や、その解決については力になれると考える。

平成の大合併では1万人が一つの目安であったが、その根拠の一つに、中学校1校を維持する人口規模は6千人から8千人といわれていたことがある。また、この人口が確保されなくても、かつては町村を超えて組合立の学校を設置していたこともあった。これは現在でも可能な制度である。

また、学力について、少人数指導等が行き届いていたり、NRT等の学力検査の結果がよいなど、学力を伸ばせる実績があるのであれば、特認校として、希望する生徒・保護者を学区外から受入れるようにすることも考えられる。

地域を存続させるという視点から言えば、30代40代の子育て世代にとっては、学校が身近にあるかどうかは大きな問題となるだろう。この世代がいなくなると、今後地域の核となる、地域を支えていく世代がいなくなるということになる。この点でも学校の影響力は大きいといえるだろう。

(B 委員)

答えを見出しにくい課題と感じる。選択肢のどれを選択しても課題はある。しかし、六合地区に中学があることによって成立する教育活動があると思っている。かつて、六合地区の方言の研究に携わった経験から、六合地区は学びの空間として非常に優れていると感じる。この特色を生かした教育課程を編成し、そのもとで子どもが育っていくことが望ましいと考えている。地域学習を進めることにより、考え方や学習の幅など世界が狭まるということはなく、むしろ世界につながるようになる。地域を生かすことが世界に広がっていくことを見据えて教育課程を編成することで、特色ある優れた学校運営がなされることが理想であると思っている。

本件について、中学校を存続させる際の学習面や部活動でのマイナス面が取り上げて説明されている。しかし、部活動は全国的に見直しの方向性にある中、選択肢の幅が多いことが重要課題であるかどうかもう一度保護者の方々と問い直してみたり、学習面についても、少人数ならではのプラス面にも目を向けて議論できるとよい。

(G 委員)

特色のある教育活動が展開されている。大きく2つのポイントがあり、一つは、地域の中に入って、自然環境や伝統文化に触れ合う中で学んでいること。もう一つは、こども園、小学校との連携が深いこと。この二つが考えられる。特に、地域学習は地域にこどものためを思って協力して下さる方がいることで成り立っている。過去に学校統廃合があっても、「ふるさと研究」など、伝統ある学習活動が実践されている。地域へ出て学ぶことは、学校統廃合となれば、失われるだろう。教科書では学べないものを学び、人とコミュニケーションすることを身に付けてきた人は、考えがしっかりしているという印象をもっている。

(H委員)

中之条と六合が合併したとき、六合地区の人口は1700人台だった。現在は1300人台に減少している。生徒数の推移は示されているが、今後の議論には六合地区の人口の推移も資料があるとよい。地域の中に学校を支えている方が大勢いるが、その地域の人口が減っている事実も参考としていただきたい。

(I委員)

保護者の中には、中学校を残してほしいという意見が多数あった。若者が成人して、戻ってくる場所を残してほしいというような意見もあった。一方で、私たちの世代が、子世代に願いを押し付けるようなことにもなるので、強い意見は言いづらいという声もあった。少人数のよさ、大人数のよさについても意見交換があったが、結論には至っていない。町に早く決めてほしい、方向性を早く示してほしいとの意見もあった。

生徒数は減少し、現在21名であるが、部活動の活躍も見られる。陸上部、テニス部とも県大会に出場するなど、好成績を上げている。個人の努力だけでなく、学校の指導体制のおかげと思う。

(A委員)

小学校の保護者の方の意見が聞きたい。

(D委員)

現在の小4は学年一人であり、修学旅行を上学年と行くことも検討しているような状況であると聞いている。

少人数教育等、大人から見ると恵まれた環境といえることもあるが、少人数による弊害について、複式学級についてや長時間に及ぶスクールバスでの通学等、不安も拭えない。六合の中でも田代原等、住む場所によっては草津が近かったりすると意見も違うだろう。長野原にお世話になりたいという意見もある。六合中を残したいという人もいる。これをどのように決めていくかは大変難しいと考えている。

(J委員)

一人の母親としての意見を述べます。小学校に子どもがいる。正直、子どもが十人十色なように、家庭によっても意見は違うだろう。私の家の場合は、主人が六合生まれで六合育ちで、好きで六合に住んでいる。以前から少人数であったこともあり、少人数でも十分教育の効果があると考えているため、六合中が存続しているのであれば、最後の一人になっても子どもを通わせるつもりでいる。しかし、ご家庭によっては、町場のマンモス校と比べ、部活の選択肢がないことや、数人の友達とのコミュニケーションしかないことに不安を感じている人もいる。

よく「井の中の蛙」になってしまうので、大きい学校に入れたほうがよいという意見の方もいるが、私は少人数のデメリットを感じていない。例えば、高校に進学した際に、少人数の中学校の出身の方が優秀だったりした。

六合地区に住む人は自信を持って地元のことをアピールできていると思う。県外では、「群馬」、「吾妻」というより「六合」の方が通りがいいことがある。各家庭によって、色々な意見があり、町の方向性が決まらないのだったら、私立等、町外の学校を考えるご家庭もある。そ

のような状況であっても、我が家では、自信を持って六合出身です、六合で学びましたと自信を持って言えるようにして、送り出したいと考えている。

(篠原会長)

まだまだご意見を聞きたいところですが、予定の時間となりました。本日のご意見が次回に反映していくよう、また、資料についてのご質問につきましても事務局にて調査の上、回答してもらおうこととし、協議をこれまでとさせていただきます。

1 1 その他

(K委員)

統廃合等の先行事例で、子どもの意見を聞いたような事例はあるか。

(A委員)

これまで参加した事例の中では、ないです。それは、子どもに聞けば、よい学校であるほど「残したい」という意見が多く出るだろう。そもそも、未来の学校の在り方について考えることであり、また、子どもの意見を聞いてしまうと、子どもたちにその決定の責任の一端を担わせてしまうことになってしまう。例え、子どもの意に反する決定になったとしても、ここは大人の責任で判断すべきところであると考えます。簡単なアンケート等なら可能かもしれないが、この場に子どもを呼んで意見を言わせるようなことは、子どもにとってあまりにも重いことだろうと思う。

(E委員)

お願いになりますが、各家庭でお子さんとの意見をよく聞いていただき、その上で保護者の意見としてこうした場でご発言いただくのが大事と思う。

戻りますが、資料について、六合小から六合中に進学するときどのくらいの転出があるのかというデータがほしい。今後の議論の裏付けとなるだろう。

(篠原会長)

多くの貴重なご意見をいただくことができました。次回の会議にて更に深めていきましょう。ただ、議論をだらだらと続けることは避けたいと思います。今年度中に方向性を示すという現実があることを踏まえ、今後ともよろしく願います。

1 2 次回検討委員会の日程について

日程調整をし、9月25日(火)から28日(金)の間で開催。会場は六合支所大会議室、時間は午後3時の予定。

1 3 閉会の宣言

午前11時40分、会長、中之条町立六合中学校検討委員会の閉会を宣す。